

〈研究ノート〉

金子光晴『IL』の生成批評版 ——第一部「IL」まで——

櫻井 遼太

はじめに

放浪、反戦、抵抗、エロス、文明批評……詩人金子光晴（1895-1975）についてのこうした枠組みによる議論は、『鯨』（人民社、1937年）をはじめとする中期以降の詩、画業、あるいは、自伝に描かれた彼の破天荒な生涯をもとになされることが多い。この一方で、金子がキリスト教と関わりのある作家であることは指摘されることが少ない。もっとも、明治のキリスト者作家を代表する北村透谷（1868-1894）や島崎藤村（1872-1943）らの詩や評論と彼ら自身のキリスト教信仰における葛藤との関係が不可分であることに比べれば、同様の特徴を金子文学に見出すことは難しい。彼の詩的想像力の特徴と深く関係するのは、すでに指摘されているように1928年からの約5年間に及ぶ金子の海外生活であると言えよう⁽¹⁾。晩年の金子自身、彼が11歳の時にプロテスタント教会で受洗したことを生涯における重要な出来事と強調する一方で、「キリスト教は遂にアクセサリーに終わってしまった」とも語り、その後の教会生活や彼の信仰に関して言及していない（1976年、108頁）。自己および自己と神との関係の文学的探求を試みるが、教会やキリスト教指導者との関わりが深くなるほど受け入れ難い考えに衝突し、やがて信仰の道から遠ざかっていく——戦前日本のキリスト者作家に共通する傾向——という姿は、金子には見当たらない⁽²⁾。

しかし、金子特有の韜晦を鵜呑みにし、金子の詩とキリスト教との関係の考察を断念するのは早計である。むしろ、興味深いことに、彼の詩には一層その円熟

さを増す『人間の悲劇』（創元社、1952年）以降、しばしばキリストが重要なモチーフとして現れる。そして、金子の詩の集大成と言われる『IL』（勁草書房、1965年）はこの延長にある⁽³⁾。筆者は先の拙稿でこうしたモチーフの連続性を理論的に考察し、さらに金子の初期詩作との連関においてこの詩的形象を捉え直すことを試みた⁽⁴⁾。この手法により得られた『IL』に登場するキリスト像は、金子が一貫して関心を寄せてきた人間存在というテーマの変奏である。別な表現を使えば、この登場人物は金子の信仰観の文学的表明というより、彼が後年思いを寄せた周縁化された人々の悲哀や絶望を表現する上での効果的な詩的イメージである。この通時的な視点に基づく解釈は、従来の『IL』単体を対象とした場合の分析によるキリスト像、すなわち、「神より追放された孤独な永遠の放浪者」（佐藤泰正、1982年、135頁）や「老年の生のありよう」（中村誠、2009年、230頁）に対して、新たな視点を提示しようとするものである。

さて、『IL』の初版刊行から約半世紀を経た2010年に『金子光晴・草稿詩集IL イル〈自筆ノート〉復刻』（金子光晴の会）が出版された。金子の伝記作家、原満三寿は同書の解説においてこの資料の価値を「すべて光晴の詩魂を彷彿させる自筆ノートであること」、また、「刊行詩集と草稿詩集を比較精査すると、加筆、削除、改作がきわめて多く、光晴の推敲の軌跡を、生々しく追体験するのを見ることができるところ」の二点に認めている（2010年、152頁）。これらに加え、『IL』が金子の詩的世界の深まりを最も良く示す晩作であることを踏まえるならば、この草稿と定稿を比較し、これを資料化することは金子の文学研究全体にも資するところが大きいと言える。しかし、管見の限りこれまでこうした研究は試みられていない。

こうした研究状況を踏まえ、筆者は『IL』の草稿と定稿の比較を示す資料の作成を行った。本稿は「IL」、「菌朶」、「蛇蝸の道」の三部で構成される『IL』の第一部「IL」の生成批評版である⁽⁵⁾。上述の新資料を草稿、『金子光晴新詩集IL』（勁草書房、1965年）を定稿とし、原による解説で示された基準に従い、この二稿の間の相違を「漢字と平仮名の使い分け」、「単語の変更」、「単語の前後の変更、

加筆]、「文章の大小の加筆」、「文章の大小の改作、入れ替え」という5つの項目に沿って検討した。以下、これらの項目の表記の仕方を示す。

(1)「漢字と平仮名の使い分け」は、草稿の表現に取り消し線を引き、これを上付きで示した。

例) くたびれてはゐるが、^肉体からだをもつてゐる。

(2)「単語の変更」は、草稿の表現を亀甲括弧内でイタリック体にして示し、これに対応する定稿の表現に矢印を付けて併記した。

例) [『羅馬衰亡史』→]『薬草論品講座』を手にうけたままで、

(3)「単語の前後の変更、加筆」は、変更による削除箇所に取り消し線を引き、加筆箇所を下線部で示した。

例) 怖れ気もなくそのなかを、いとすこやかにあゆびつづける。 ~~怖れしらずな~~のだ。

(4)「文章の大小の加筆、削除」は、加筆箇所を二重下線で示し、削除箇所は資料末尾に一括掲載した。

例) モーゼスよりも、また、イズラエルの子孫、アロンの子の祭司達、エレアザルとイタマル、その他の誰人よりも、

(5)「文章の大小の改作、入れ替え」は、二段組みで示した。本項目に該当する定稿の表現を網掛けで示し、これに対応する草稿箇所を右側に並置した。後者の末尾には『金子光晴・草稿詩集ILイル〈自筆ノート〉復刻』（「草稿」と略称）の頁番号を記した。

- | | | |
|-----|--|---|
| 519 | あひかはらず、かなしさう
な微笑をうかべたままキリ
ストは立つてゐたが、 | あひかはらず、悲しさうな微笑を泛
べて立ったまま、キリストは、みる
みる、砂塵の小旋風やうに遠ざかっ
ていった。(「草稿」、74頁) |
| 520 | 突然、枯草のうへをきりき
り廻つて近よつてきた砂塵
の小旋風が、 | |
| 521 | 眼の前から彼さらつて、一 | |

回二回、裏おもてにしてみせ
 てから、
 522 キリストはみえず、竜巻だけ
 になつて、みるみる遠ざか
 り、うす光りした海のむかう
 へきえていつた。

また、定稿における改行一字下げの全箇所を番号を振り、この番号をもとに上記5項目の該当数を表1に示した。

項目 \ 章	序	一	二	三	四	五	六	七	八
漢字と平仮名の使い分け	13	4	2	4	2	8	7	0	4
単語の変更	24	9	10	14	5	9	35	12	6
単語の前後の変更、加筆	21	8	13	19	9	19	46	12	40
文章の大小の加筆、削除	2	0	0	2	24	2	1	5	9
文章の大小の改作、入れ替え	3	1	1	7	22	3	16	20	63

表1. 「IL」の草稿と定稿の比較一覧表（本稿筆者作成）

本資料に基づく「IL」の具体的な考察は別稿に譲るが、上記の表が示すように章ごとに推敲の量と種類に大きな違いが認められるのが『IL』の生成の特徴である。特に、他の項目に比べて作品の質的な変化により大きく関与する「文章の大小の改作、入れ替え」が四章、七章、そして八章——いずれも語り手「僕」によるキリストの焦点化が際立つ章——に集中していることは見逃せない。原は草稿について金子が精力を傾注して作り上げた「もう一つのIL」であると述べているが（2010年、157頁）、「IL」がキリストを指すことを踏まえるならば、草稿は「もう一人のキリスト」についての詩と言い得るのである⁶⁾。しかし、既述の『IL』の性格上、こうしたキリスト像の差異は金子の詩作全体の中で捉え直すとき、その変容の意義が明らかになると考えられる。この意味で、筆者は「もう一人のキリスト」から定稿のキリスト像への変貌には海外生活の中で培った随筆の

表現技法が重要な役割を果たしていると考えている。しかし、この点も本資料を用いた「IL」の具体的な考察と合わせて別稿で詳しく検討したい。

注

- (1) 詳しくは堤（2003）、石崎（2004）を参照のこと。
- (2) 戦前日本のキリスト者作家の葛藤に関する詳しい説明はTomasi（2018）を参照のこと。
- (3) こうした『IL』の評価については清岡（1965）、満田（1968）、佐藤（1969）、野村（2004）を参照のこと。
- (4) 詳しくは櫻井（2017）を参照のこと。
- (5) 生成批評版の作成にあたり、松澤（2003; 2014）を主要な資料とし、表記方法等の技術的な点に関しては井田（1979）、中原（2015）を参照した。
- (6) 初刊『IL』の帯には「『IL』（かれ）とは、キリストその人である。かれは日本に来て、何を感じ、考え、絶望したか」と記されている（中村、2009年、213-214頁）。

参考文献

<金子テキスト>

- 金子光晴『金子光晴新詩集 IL』、勁草書房、1965年。
 ——『金子光晴全集』第6巻、中央公論社、1976年。
 ——『金子光晴・草稿詩集 IL イル〈自筆ノート〉復刻』、川島書店、2010年。

<その他>

- 井田康子『高村光太郎の生と詩』、明治書院、1979年。
 石崎等「異境の詩学 I ——金子光晴とアジア」、『立教大学大学院日本文学論叢』第4号、立教大学大学院文学研究科日本文学専攻、2004年、120-143頁。
 清岡卓行「解説」、『金子光晴新詩集 IL』、勁草書房、1965年、1-8頁。
 櫻井遼太「人間へのまなざし——集大成としての金子光晴詩集『IL』の一考察」、『ICU比較文化』第49号、国際基督教大学比較文化研究会、2017年、23-60頁。
 佐藤泰正「現代詩と神——その序説・金子光晴の『IL』をめぐる」、『国文学 解釈と教材の研究』第14巻12号、学燈社、1969年、75-80頁。
 ——「金子光晴小論——その晩期詩篇の宗教性をめぐって」、『日本文学研究』第18号、梅光学院大学、1982年、133-142頁。
 堤玄太「金子光晴のアジア——マレー半島での意識の転位を中心に」、『アジア遊学』、勉

誠出版、2003年、148-159頁。

中原豊「中原中也」、『近代文学草稿・原稿研究事典』、日本近代文学館編、八木書店、2015年、305-308頁。

中村誠『金子光晴——〈戦争〉と〈生〉の詩学』、笠間書院、2009年。

野村喜和夫『金子光晴を読もう』、未来社、2004年。

原満三寿「新発見・草稿詩集『IL』〈自筆ノートについて〉」、『金子光晴・草稿詩集 II イル〈自筆ノート〉復刻』、川島書店、2010年、152-157頁。

満田郁夫「金子の詩について——詩集『IL』を中心に」、『文学』第36巻10号、岩波書店、1968年、68-85頁。

松澤和宏『生成論の探究』、名古屋大学出版会、2003年。

———.「生成論／本文研究」、『日本近代文学』第90集、日本近代文学会、2014年、183-187頁。

Tomasi, Massimiliano. *The Dilemma of Faith in Modern Japanese Literature*. Routledge, 2018.

『IL』 第一部 「IL」 生成批評版

序

- 1 わが胸の奥の奥の小景まで、からんと透いてみえる
2 そんなときまで生きねばならぬのは、つらいことだ。
- 3 それに、僕には、太陽や、そよ風などと和解してゐる時間が
4 そろそろ、なさそうなくあいなのだ。
- 5 かなしむのは、はやい。僕は、まだ、ひとりぶんのなま身を
6 くだびれてゐるが、~~からだ~~肉体をもつてゐる。
- 7 ときおり、いはれも〔わからずに→〕しらずにうかれはしやぐこともあるこの^{##}
からだには
8 あいきょうにも、ちよつぱりへのこまでついてゐる。
- 9 びつくりするにはおよばない。そのうへ、僕には
10 どうつかつたらいいものか、つかひのこしの、僕の『時間』がある。
- 11 時限爆弾にしかけた時計の分、秒を数えて待つほどの、〔わづかな→〕あじきない
『時間』ではあるが。
12 その時間は、〔すべて→〕あたりが灰と、空無になつたあとまでも
13 怖れ気もなくそのなかを、いとすこやかにあゆびつづける。怖れしらずなのだ。
- 14 そうそう、まだなじみのない方々に、^{たかざ}高座ながら
15 じぶんで~~##~~じぶんを紹介したいとおもふ。
- 16 ~~##~~^{ひとこと}他人事のやうに遠い昔のはなしだが、ほんのゆきがかりから
17 神學を志す身が、骨董商の手代になつて、海をわたつたりして、
18 〔うるところもなしに→〕二度とない青春を、うるところもなく無駄づかひした一
日本人、それが、僕なのだ。
- 19 そして、悲運が生涯しみついて、血の氣の〔乏しい→〕うせた、陰氣な年寄り。
20 いたいたしい愛情の裸出部から、

- 21 びつしり^{わいで}湧いて^{へにさし}首をふる紅蛆。血液型はO。五黄、土性。
- 22 山風蠱。旋毛まがりのやうでる 山風蠱。旋毛まがりでありながら、
て、芯のかほそい 芯のかほそい、(「草稿」、4頁)
- 23 たのみにならないうへに、そのうへ怨みがましい、そんな男が僕だ。
- 24 葛天氏^{かつてんし}の民だなんて、とんでもない。この僕は、
- 25 ^{おに}おに菱や、[蓮で→] 蓮根で [蔽はれて→] ひしめいて、マラリヤ蚊の棲息す
るといふ
- 26 [低湿な→] 低湿な沼地から、這いあがつてきたどぶ鼠なのだ。
- 27 ——青泥、赤泥の底ふかくに、^{まみれ}塗れてしづんでゐるかもしれないソドム、ゴ
モラ。
- 28 ごぼりがぱりとうきあがる、生き死にの泡沫^{あぶく}。放屁—なま欠伸。
- 29 神の目のとどかぬ、まつたくの 神のみない、まつたくの忘却圏。
忘却圏。(「草稿」、4頁)
- 30 わき目もふらず追ひ^{せめて}こしていつたお洒落娘どもを
- 31 いくたりやりすごしたものだつたか。
- 32 消えていつた虹のにぎやかさ。わが不發の人生よ。それから、[目じるし→] 対象
のない、むなしい射精。
- 33 計画的の [まづしさ→] 貧困から、疎懶から、おもひがけない手落ちがあり、
- 34 さまざまなできごとがふつてわいたが、
- 35 それがまた、僕の身边を、^{どそく}土足でどたどたと^みふみ荒らしておいて、どこかへ去
つてしまった。
- 36 [時間→] 時のあゆみは、^{年ごと}年毎に加速度を増し、[呼吸→] 息づかひは七だい
にせわしくなつてゆき、
- 37 おほかたの経験は、あらためてみる [いとま→] ひまさへなく、
^{こより}柵に縄をかけたままで、先へ、先へともちはこばれるが、
- 38 九天にかえるそのときは、からだ一つ。
- 39 明日にのこされた福分は、決七で手つかず [僕らの→] 僕のものではない。
- 40 けふまで僕が生きてゐた、ほんのわづかなそのあひだに
- 41 東京は、二度まで [火刑をうけた。→] 火あぶりになつた。

- 42 きのふのことのやうにしかおもはれぬ、ここ十年のあひだに
 43 アフリカ大陸だけで
 44 三十と〔五つ→〕六つの國が名宣りをあげた。
- 45 大小のボスたちのために流された、夥しい血を吸ひこんで、大地は、
 46 ^{あかまむし}赤蝮のやうに、のたうつた！
- 47 自由とは、争鬪の〔思想→〕名目。にほかならず、老ひぼれた支配にもまして、
 新しい〔政治→〕正義の非人情が、
 48 城砦のくづれ、そのまはりに身じろぐ沙漠に、
 49 ほろほろな蟻塚や、漆畑うるしばたけに、〔白くひび割れた→〕一望のひびわれた^{ニル}デルタに
 50 ひからびた、はりがね虫のやうな論理を這ひまわらせ、
 51 『暴をもつて暴に易える』野心家どもをつけあがらせた。
- 52 浮説ではない。僕がものごころついてからの短日月に、
 53 靈魂の不滅にかはつて、〔『資本論』→〕唯物弁證法が、脳組織から膀胱まで、人
 間の
 54 部分品のいつさいを、そっくり入れ換えてしまつたといふ。
- 55 世界から戦争をなくすための戦争に耐えぬいて、
 56 生きのこれるやうな不死身に、人間を、
 57 つくりかえることが、なにより先といふ次第だ。
- 58 七十年近くも生きのびながら、なに一つ、からくりの底が見ぬけなかつた
 59 僕の思量のなんと寸足らずだつたことか。
 60 〔どんな→〕いかなるまつとうな理法でも、人間どもにかか
 つては、逆用されずにはすまされないのだ。
- 61 みたくもない人生ばかり〔見てしまったけれど→〕見てめぐつたけれど、まあ、
 62 腰をかけることとしよう。石段のいちばん下の段に。
 63 それから、パンをちぎらふ。それからなにをしよう。考えることがまだ、あつた
 かしら。
- 64 あたまの^{せう}へを、ヘリコプターが通る。そこからふりまかれたピラが

65 のどかにあそびながら舞ひおりの。

66 目のまえにおちた一枚を、僕は、ぶしようらしく足先で引きよせ
67 手にとりあげて、よみあげる。

68 『まことに、なんじらに告げん。天國は近きにある』

69 天國は、近きにあるか。—— はて、それは、耳なじんだことばだが、
70 それもそのはづ、二千年もむかしからそのことばが、人間の〔靈魂を→〕妄念を
とりしづめてきたものだつた。

71 もっとも—その約束は、はたされにくくなるばかりだが、

72 氣にかけることはなにもない。こころけがれない人、
73 やさしいまなざしの、さまよへるあのナザレ人を、おもひ泛べてみるだけで、
74 猜疑ぶかい、僕のこころも、ほつとやすらぐやうだ。

75 そして、もう一度、人生に賭けてみる生氣をとりもどし、
76 じぶんと言ふ。

77 ——球根をうえよう。

78 アマリリスを夢みながら。

79 氣おふなどは、決してほめた芸当〔ではない。→〕とは言えない。

80 健やかな虚脱の状態、爽やかな
消耗感で、いつもすこしばかり、
生きてゐるのが迷惑なくらゐるの状
態が、もっとも、生きるに快適
な、理想的なありかたなのだ。こ
の人生には、躍気にならねばなら
ないほどのことが、そうたんとあ
らうはづはないのだから。

健やかな虚脱の状態、爽やかな消耗
感で、いつも少々、生きてゐるのが迷
惑なくらゐなのが、ちょうどよい。
〔草稿〕、11頁

81 日本に上陸したとき、キリストは、わざと^{びっこ}跛をひいてみせた。

82 一目みてすぐ、僕は、やっこさんだな、と見やぶつた。

- 83 サンダルを突つかけた、なまつ白いその素足の甲に、
84 釘で打ちぬいた、ふるきづのあとがあつたからだ。
- 85 なまめかしい爪化粧の〔胭脂→^{べに}紅で、足の爪が染まつてゐる。
86 いや、きつと、それは、情婦たちが泣いて別れを惜しみ、かはるがはるその足を
抱いて、
87 くちびるの色いろをうつしたのだ。
- 88 セールスマンのやうに彼は、手提げ鞆の一つぶらさげてゐた。
89 第二次世界大戦が終つたあとの、けつたいな日本ブームでやつてきたらしい。
- 90 なまあつたかくて、かつ懈^{たる}い生理をそのままに、港に雨がふつてゐた。その埠頭に
彼は、立つてゐた。雨のなかにとけるアネモネのやう
に。
- 91 税関役人のまえに、彼は立たされたが、なにかにすがるか、よりかかるかしなければ
92 ながくは、ひとりで立つてゐられないようすであつた。
- 93 まづ、植物とすれば、あけびづる。からきし正体もない水母か、蛸か、白なまこ。
94 [すりきれた→] すり切れていたい砂浜。
95 目を病んで、まぶたがふくれ、赤くただれた姥鮫か、かんぎ^{うばさめ}鱒^{がんぎえい}。
- 96 熔岩がおしながしていつたあとにのこされて、焼けふすぼつた裸木。
97 直立すると、膝のへんがうしろに反つて、O字形にひらいた脚の、まつたくおか
しな姿勢だが、
- 98 そんなからだを支えてゐる、精神のほうだつて、
99 へんてこりんでないわけは〔ない→〕あるまいと、誰も〔おもひさうなことだ
→〕うなづけることだ。
- 100 老官吏は、眼をしばたき、パイプの口を噛みながら、
101 くすぐつたさをこらえるときの顔つきで、しばらくのあひだ、彼をながめ、足の
先までみおろしてから、
102 鞆のなかは〔あらためもせずに→〕あらためて見ようともせず、白墨で検閲ずみ

のまるいしるしを書いた。

- 103 底意地のわるさうな、針の吊り眼の、若い役人がつかつかよつてきて、
 104 彼のからだをさぐりはじめたが、みてゐるあひだに、その男は
 105 ^{つらら}氷柱になりはてた。
- 106 奇蹟が行はれたのかもしれない。日本國ぢゆうが、
 107 たちまち、胴ぶるひをしはじめ、
 108 樂器といふ樂器が、窓から飛び出し、空に舞ひあがつて
 109 [いつまでも→] てんでんに、鳴りつづけてゐた！
- 110 『愛』の作用^{はたらき}かもしれない。ばらいろのジヤングルでも、
 111 ばらいろの野象や、ばらいろの蛇や、くも猿などが
 112 パラダイスを夢にみながら、眠り恍けてゐるといふ。
- 113 [雨でつかつた→] 雨づかりの塹壕でも、トーチカのなかでも、野戦病院でも、
 114 バイブルのなかの彼のことが、節入りで [きこえてくるとき→] ながれてくる
 とき、
- 115 そのときだけが、正直、なく そのときだけが、いちばんなくさめ
さめであるそうな。 になった。(「草稿」、16頁)
- 116 人が死んでからどこへゆくものか、生きてゐるうちは誰にもわからない、それだ
 からかもしれない。
- 117 ほんの子供騙しの^{けれん}のやうだが、バーの天井まで、
 118 青い鳥^{さん}が、紙のやうにばたばたとび^{まわ}まわる。
 119 くたびれた足のためには、階段の途中から
 120 坐りごちのよさそうな雲のお迎えがきてくれる。
- 121 天國は、^舞ことによると、すぐ近くまでやつてきてゐるらしい。
 122 ガレリヤ生れのまじない師、イエスのために、
 123 傳道師たちのながい宣傳の苦勞が [みのつて→] 實をむすび、いまでは、世界の
 津々浦々まで人々が、
 124 ところをひらいて迎えやうとしてゐるのに、
 125 パスポートももたず、[孤獨で→] ひとりぼつちで、しょんぼりと、

- 126 宿なしの犬のやうな旅をつづけるのは、どうしたわけだ。
 127 彼とわかつてゐるのは僕だけ 誰ひとりとして気がつかないが、知っ
 だが、このことは、うつかりし てゐるのは僕だ。この僕だけだ。うつ
 やべるまい。 かり喋るまいぞ。このことは。(「草
 稿」、17頁)

二

- 128 彼があるきまはるうしろから、僕は、そのあとをつけ
 てあるいた。
 129 貝灰がふりつもつたやうな、森閑とした堀端を通過つて、
 130 老い朽ちて、忘れられたやうな木橋を、いくつかわたり、
 131 人の世の山坂を一目で〔みはらすのに→〕見おろすのに〔いい→〕かつこうな高
 台に出たり、袋小路に額をぶつけたり、
 132 砂利置き場や、ごみすて場になつたあき地の草つ原や、
 133 いまさつき通つたおぼえのある小屋掛けのストリップの
 134 立て看板の前に、いつのまにか戻つてきてゐたり、
 135 ずいぶん僕も、根氣よく食ひさがつたものではあるが、
 136 それよりも、青つちよびれたあの尺取り虫の、芯のつよさには、ほとほと感心した。
 137 それで、僕が、新米の探訪記者をそのままに、のつのつしながら、
 138 『ときに、日本へは、どんな御用向きで、それから、おおよその御滞在のスケ
 ジュールは』
 139 などときり出すことのできたのは、暮れかたちかくなつて、
 140 『随意小酌』とするした安飯店の一つの円卓の
 141 となりの椅子に腰をおろした、そのときがきっかけである。
 142 わが主イエス・キリストは、緋紅に透いた鼻翼の、尖つた鼻先に、水つ涙の玉を
 〔つけ→〕とまらせ、
 143 紅玉髓のやうにきれいに澄んだ眼で、じつと僕をみて、それから、言つた。
 144 『ニホンのお嬢さんがたと、お友だちになりたいのです』
 145 低い、かすれ声のその日本ことばには、どこかに関西訛りがある。

- 146 花のつぼみのついた油菜と、冢のあぶら身をいれた醬麵の茸鉢からは、
 147 まづしいものはさいはひなるかな。この世を天国でつつむ
 148 あたたかい湯気がたちのぼる。
- 149 ——なるほど、フェミニストの〔天下の草分け→〕草分けはあなたでしたな。
 150 ことばでさういうかはりに僕は、好奇心の粘つこい舌で、あひてをなめまはす。
- 151 なんぜんびしゅう南膳部州のはてにあるといふ、蓬萊の〔鳥ぐに→〕鳥、この日本でも、
 152 この人のけだかい教義と行蹟とは、おもひのほかには知れわたつてゐる。
 153 ヨハンネヤ、スザンナヤ、マグダラのマリヤヤ、そのほかに
 154 ゼベダイの妻サロメなど、ぬしある〔女まで→〕女衆まで、〔いのちまでもと→〕
 いのちをかけてもと彼にうちこんだ婦女子連は
 155 橄欖山のうへにまたたく星の数、チベリヤ湖にいさどる網にかかつた
 156 大小の魚屑の数ほども、数えきれないおびただしさときいてゐる。
- 157 まくさ秣くさいセム族の、黒いくせ毛の女どもはいま、
 158 うちそろつて、〔みな→〕みんな、永遠の生を享け、
 159 天の花ぞので、あそびくらししてゐるはづなのだ。
- 160 聖女たちがうけた恩寵にあやかりたいものと、惜しげなく、
 161 かけがえのない純情をささげものにして、あとを慕ひ、
 162 花にあつまる蝶のやうに、彼のまはりでひらひらする女たちが、
- 163 あれから、二千年もたつてゐるのに、いまも猶、ひきもきらず、
 164 地のはてばてからあつまつてきて、たちまち列をつくるのには、
 165 さすがの彼も、さぞかしもてあまして、本心では、うんざりしてゐることと察し
 てゐたのだが、
 166 ころろひろやかで、偏ることのないその人は、
 167 どんなときにも、柔和さを失はず、〔やさしく→〕やさしいことばをかける。
 168 『むすめ御よ。ころろやすかれ』と。
- 169 煩しくなつて突慳呑につき放し、遠のいたあとでおもひ泛べる、女の小さな姿が
 170 どんなにいじらしくみえてくることか。熱砂や、焼石みちで、ゆきくれたもにとつて、
 171 どんなに女の唾液の甘いこと 女の唾液のしんしんと甘いことか。
 か。 (「草稿」、23頁)

- 172 それほどのことなら、僕にだつてわかつてあるつもりだ。それだから、
 173 なにかの下心や、ごますり根性からではなく僕は、
 174 ~~親身~~しんみになつてかんがえる考えるのだ。
 175 『わが主よ。僕にまかせておいてください。このくにの小娘たちは、
 176 堇の花束や、サイン帳をもつて、きやあきやあ言つて、
 177 あなたのゆく先へ、どこへでも、[きつと→] かならずあつまつてまゐりますよ。
 178 釘や、[赤い鐵屑が→] 鉄くづが、磁石のほうへ吸ひ寄せられてくるみたいに』

三

- 179 『キリストだとばかりおもつてみたら、おや、君は、死んでるはづの
 180 獮さんじゃないか。どうして、また』
- 181 汗でべつとりとくつついたツボンが、朝涼^{すが}になつて
 182 ひとりでにかはいて、それがすねからはがれるまで、
 183 夜通しあるきつづける彼と、僕は、つれ~~だつて~~立つてあるいてみた。
- 184 そういえば、まつたく瓜ふたつだ。ちがつてゐるところと言えば、
 185 琉球うまれの詩人のほうが、いささか毛ぶかいこと。
 186 神と〔話をする→〕はなしあふとくに、泡盛がほしいことぐらゐで、
 187 ふたりともそろつて〔柔和→〕お人柄で、謙遜ぶかく、
 188 それから、いつもききとれないほどの低い声で、しづかにものをいふ。
- 189 『どこかで、なにかが、まちがつたのではないでせうか。
 190 この道は、ねえ、かねこさん。へんなところへ出てしまひそうですよ』
- 191 『まあ、まあ。そんなに心配する〔ほどのことはない。→〕にはあたらない。たと
 へ、君がほんとうに、キリストであつたにしても、
 192 この^異くにのゆるんだ法律では、せいぜい、密入國か、浮浪罪、
 193 さもなくば、交通法違反か、猥褻罪くらゐなもので、
 194 はりつけのやうな大それた、 はりつけになるやうなことには、め
おどし道具は顔を出すまいか つたにないから』(「草稿」、25-26頁)
 195 ら』
 195 お蔭で、僕は、気をゆるして、冗談まぢりにおしやべりができる。

- 196 『僕がキリストなんですつ
て？ それは、どういふことで
せうか。』
- 197 僕は、生きかえつても来た
やうなようすで、それがなんだ
か羞かしいんですけど、
- 198 やつぱり、いけなかつたので
すか』
- 199 獏さんは、申し訳なさそうな、てれくさそうな、
200 寂しい笑顔をしてみせる。
- 201 いけないどころか、こんなた たのしかつたじゃないか。(「草稿」、
のしいことはないのだ。 26頁)
- 202 あの戦争のはじまるあと先ごろ、ふたりのほかに誰にもしやべれない、しやべつ
てゐることをきかれただけでも、
- 203 八つ裂きに〔なりそうな→〕されそうな、僕らだけのせいいつばいの鬱憤を、
204 そのときもふたりでこうしてあるきながら、さんざん話しあつたものであつた。
205 日本人は、みな謀者になつて、従来のすれちがひにも、
206 きき耳を立ててゐたものだつ きき耳立てられてゐるようになら
たが。 なかつたが。(「草稿」、27頁)
- 207 でも、いまの日本人は、あの頃とはまるでちがふ。彼らは、いまでは、
208 選ばれた民でもなければ、東 虎の威を借りる狐ではない。選ばれ
洋の盟主でもない。 た民でもない。いぢけて、へらへらし
- 209 あいかはらず勤勉で、正直で、 て、たよりにならないが、害心はない。
そのうへながいものには巻かれ (「草稿」、27頁)
るだが、
- 210 わが身かはいさの底意や、駆
引きが、気の毒でみてはゐられ
ない。
- 211 どこまで本気が眉唾だが、日本もデモクラシーの看板をあげ、とりわけ外国人と
みればふしぎなくらみあいそうがよく

- 212 旅人のみごちのわるいはづはない。
- 213 石ころだつて、ふうわりと、風船みたいにかるくはづんで、
214 空宙で、神さまたちとあそんでゐる。
- 215 主よ。かつては、サマリヤ^{サマ}人として、弟子たちといつしよに
216 三界にゐるにところなく、逐はれる〔道すがら、→〕路々、
217 群衆の手で投げられて、あなたの頬をくだいて、
218 [血まみれになつた→] 鮮血に染まつた、その石ころが。
- 219 僕は、詩人の瘦腕をつかんで、つよくゆすぶつた。そしてたづねた。
220 『キリストよ。そもそもあなたといふかたは、胎生でせうか。
221 それとも、卵生なのですか。
222 教えてください。ネストリウス祖師が申されたやうに、
223 あなたもまた、人間の子供で、うごかぬその証拠には、
- 224 信心ぶかい画僧たちも、まぐさ小屋でうふ声あげたあなたの
225 ^{おへ}おへそを画くことを忘れはしなかつたといふわけですか。
226 また、男、女が肌ふれあつて生まれたものは悉く罪の〔肉体で→〕からだで、う
まれながらに原罪を背負つて〔ゐる→〕出てくるといふ
227 聖アウグスティヌスのことばは、信じててもよろしいのですか』
- 228 いつのまにか、建てこんだ町を出はづれて、むかしの
229 宿場のやうな低い家並み、
230 つれこみ旅館の青ネオンが、樟脳火のやうに濠水に揺れるのを〔ながめながら→〕
みながら
- 231 ふたりは、倉庫あとの、舟つきのですりにもたれて、
232 それぞれの、おもひおもひの考えにふけてだまりこんでゐた。
- 233 とりわけ、このへんは物騒な〔ほどの→〕くらゐの夜のくらさだが、
234 今夜の感動には、なんのさまたげもない。
235 鋼鉄の一枚板のおもさだけで、づり落ちさうな夜の穹窿いつばいに
236 星といふ星が、あはててしがみつき、駆けあがらふと息せき、あらそふなかに、
237 跛の星が一つ、危うく片足をふみ外す。

- 238 星とのへだたりよりも、もつと遠いところから来た人とめぐりあひ、
 239 むかしながらの友愛をとりもどす。
 240 こよひは、どこにゐても、慕しさでいつばいなのだ。
- 241 ポリス短艇ランチの遠いホイッスル。あげ潮どきの〔水→〕水面をわたつて
 242 なぶるやうな微風、つないであるままの荷舟のふなべりとふなべりがこすれ、舳みよし
 がきしむ音。
 243 サーチライトの尻しつ尾はのうすれるあかりがすぎゆきぎまに
 244 うきあがらせたその横顔は、〔最初→〕三十年前、僕らがはじめ知りあつたこ
 の、まだうらわかい獺さんであつた。
- 245 『旗の台のあの娘が、どうしてゐるかどと氣になつて、
 246 もう一度、みにいつてみたかつたのですよ』
 247 さつきからそのことを言ひたかつたのを、獺さんは、
 248 やつとのおもひで、僕にうちあけるのであつた。
- 249 女ずれしたキリストとはこと變つて、娘さんの前まへに出ては、
 250 〔人並はづれて→〕人並み以上氣の弱い〔彼→〕獺さんのことなので、
 251 用心ぶかく、ひそひそと、心配そうに僕の〔意見→〕意向をつつづくのだつた。
- 252 『もしもあの娘こにあつて僕が、あの娘を好きだといつたとき、
 253 もしも、あの娘が、それでもいいと答えたなら、
 254 交接しても、かまいませんか』

四

——キリストを見知つてゐることの
 辯。

ひとりの無神論者の祈り（「草稿」、
 33頁）

- 255 忍びしの者が、天井の節穴から下の座敷をのぞくやうに、神は、僕らの氣をゆるし
 た、じだらくな〔姿→〕姿勢や、かくれてするおこなひをぬすみみて、ほくそ笑み、
 たのしんでござるやうである。
 256 あるひはまた、このしがない
人間どもが、へぎや、ちび蠟燭
でうつし、とほしあふ火を、ひ
とつひとつ、片はしから吹き消

すことに興がおありかもしれない。神と人間とのあひだの氣まづい疎隔については、もはや、なにを言つてもおそすぎるし、なにをしてみ無駄なやうだ。この穢れ多い指先を、せめて、黄金色にけぶるあなたの御陰毛の先にでもふれさせてください、といのつてみても、それすらとどかぬ願ひで、専念、神をおもふてまぶたを閉ぢれば、わづかに、夏蜜柑のかんばしいかほりのまぢつた、火薬くさい体臭の、一そよぎの氣流を感じとることができるか、それもかなはぬか、もしくは、そんなことがみな、こちらの氣のせいかもしれないのだ。

257 鉄鋌と、コンクリートで、なにかが、いそがしそうにつくられてゆくこの時代には、なに一つ神のためにつくらうとする人間の意欲が見当らない。人間が神を見すてたのだらうか。たしかに、神の不在を嗅ぎ知つて以来のことではあるが、それより先に神が人間をあなどり、人間をおもちやにしすぎたことがある。そこで、人間は、祭壇の聖遺物函や、燭台や木彫りの聖人像などをこつそり盗みだして、骨董商にうることしか考えなくなつたものである。

ふれられるものといえば、酢酸と琉黄のほひもまぢつてゐる、むし菌くさい氣流を感じるばかりである。エホバの他に神があつてはならぬ、ただお一かたの神よ。この手を、あなたの御毛のさきにもふれさせてください。
(「草稿」、33頁)

神の不在を人々が嗅ぎ知つて以来、ブルッセル大寺も、ノートル・ダムも、ただの古美品にすぎなくなった。(「草稿」、34頁)

258 原罪や、七つの秘蹟、聖母の無原罪の御みごもりについてのどんな強論も、しつくり納得がゆかないことになったのは、人文学者やケミストたちの、身もふたもないあばき立てのせいとおもはれるが、それほど神から遠のいて、神を忘れて生きてゐる人間が、まさかのときには心が弱くなつて、坊主にとりなしをたのむのが、よくあるみちすじなのだ。それがまた、神をつけあがらせるもつとで、その神をつくつた人間どもが生れつき、生きつづけるかぎり、その人間どもを愚弄するしくみにもなつてゐる。人間が、神やその眷族の聖母のふところにあづけてある、中世風なあくがれからぬけ出られないかぎり、神は死なないのだ。そして、人はたとへ一尺でも、天の近くに住まうとして、鉄鋸をうち、コンクリートをながす。しかし、なんといつてもなじみうすで、宿年のしこりをもたない日本人にとつては、西欧の神と人との、あまりにも熱つこい^{かりあり}交渉が、一応はわかるやうでもなかなかわからない。

259 大司教アルブレヒトの利益を見護るのも神であり、食人種を改宗させるために七つの海を漂流するドミニカンたちが後

鼻欠けになった聖人たち。それは、アダムとイブの末裔が、うまれながらに背負はせられる原罪にふっきれぬ気持ちをもちはじめてからのことだが、アダムとイブを祖先にもたないかもしれない僕ら日本人には、七つの秘蹟も、聖母の無原罪の御みごもりも、もともと議論するほどの關心がない。
〔草稿〕、34頁)

神をおとりにして一仕事しやうとたくらむのは、大司教アルブレヒトにはじまったことではなく、三位一体などといふあやしげなしくみを發案し

生をたのむのも、砲門をならべ、
商會の旗を立てて、宝さがしに
出た舟主たちが加護を願ふの
もおなじ神である。神が人間の
おもちゃになり、いくら人間に
甘えても、おもひおもひの都合
をはかつてゐるからは、不死身
でゐられるのだ。それほど気が
すすまないとしても、神學者、
博士どものこねあげる三位一体
説のはてしない論議にもつきあ
つてやらねばならず、善男善女
のためにはマナを、聖人たちの
ためには、ドーナツを、それぞ
れしたくしておいてやらずばな
るまい。

260 正体のわからない怪物のやう
な、異教の神々ともせりあはな
くはならない仕儀にもなるこ
とがあらう。だが、それより
も、神にとつてなにかとひつか
かるのは、あと足でやつと立ち
あがつた靈長類の耳孫でありな
がらキリストが、僭上にも、じ
ぶんを神の子とふれあるいてゐ
ることにちがひない、もつとも
らしい垂訓をにがにがしくきき
ながし、^{はりつけだい}磔台にのぼつた彼
を、ひややかにながめてゐた。
キリストの身と魂の永遠のさす
らひは、そのときにはじまつた
ので、キリストのほんとうの悲
しみは、彼につれなかつた人間
たちよりも、父なる神の、ぞつ
とするやうなつめたさによる

て教會の権力を盤石に築きあげた、聖
トーマスらを先達にした、神學者、博
士どもである。ドミニカンたちは、食
人種を改宗させる、海圖にコンパスの
脚のひらくかぎり、七つの海をわたつ
て漂流し、砲門をならべ、商會の旗を
ひるがえす、彼らの施主たちの手引き
をした。（「草稿」、37-38頁）

とりわけとりすましたイスラエルの
神は、キリストが猿から進化したも
の子や孫でありながら、じぶんを神の
子と放言してゐるのを、冷やかにきき
ながしてゐた。キリストの身と魂のさ
すらひはそのときにはじまり、キリス
トの哀しみは、彼を磔刑にしたものよ
りも、父なる神のつめたさによるもの
であつた。（「草稿」、35頁）

ものだった。

- 261 エデンを追放されたものは、アダムやイブではなくて、ナザレ^ナ人のイエスであることを、あのはれぼつたい、紅いただれ目のイエスそれじしんほど、承知してゐるものはほかにはあるまい。

- 262 そのかなしみは、釣りあげられた魚のえらのやうに、光に透いた^{びいどろ}紺紐であえいである。つよくなることよりも、弱さを弱さのまままで育てあげることがむづかしいのだ、とそのかなしみが教えてゐる。キリストは、弱さゆえにすこやかに、そのかなしみを抱いて、おそらく考えられないほどのながい歳月を、いまもなほ、生きてさすらつてゐる。人の世のつづくかぎりのみじめさとおろかさを見てすごさなければならぬ宿命は、神とおなじで、それこそ業罰と名づけることがふさはしいものだ。

- 263 ツーリスト達にまちつて、僕は、ブルッセル大寺や、オーデナールのカテドラル、さてはまた、フェレンツェのサン・マリア・ノヴェラ寺などをたづね廻つても、振り香爐の^{わきが}腋臭くさいにほひと、繪姿と、賽銭箱があるばかりで、かんじんのキリストさまの姿も、影も、かつてそこに立寄つたことのある痕跡すらも見あたらない。そして、僕らは、僕らのふるほけた良心や、一途な氣持の空隙から、ふ

そのかなしみのいろは、^{びいどろ}紺紐で、いつも、魚のえらのやうにあえいである。強靱になることではない、弱々しいものを弱々しさのまままで育てることがむづかしいものだと、彼は教えてくれたものだ。(「草稿」、35頁)

人の壽命を百年とみても、すでに二十分も生きのびて、おそらくは人の世のつづくかぎりこれからも、人間のみじめさ、ばかさ加減をみてすごさなければならぬとしたら、キリストほど悲しい宿命を、業罰を負はされたものはほかにはないやうだ。(「草稿」、37頁)

彼が悲劇の人物にみえるのは、みな、彼の一途な眞實にこだはる、ふるほけた良心のせいなのだ。(「草稿」、36頁)

としたときに、おもひかけない彼の姿をかいまみる。サン・シュルピスの寺町裏や、ロンドンのイースト・エンドの救世軍治療所の前を、顔をそむけて急ぎ足で逃げるやうに通りぬけてゆくこともあるし、夜霧のおりたキャベツ畑のなかを、しよんぼりとうなだれて遠ざかつてゆくうしろ姿だけを見かけることもある。すれちがったときは、誰もそれと気づかないで、ずつとあとになつてからそうではなかつたのかと気がかりになるのだが、追ひかけるにしてもそのときは、もうおそい。泥炭地しおかの鹹らい湖水のへりで、棒切れで貝の殻を掘ちくりながら、ものおもひにしづんでゐる彼を見たものもある。ビニールのやうなうすい皮膚で蔽はれた、骸骨だけになつて、彼が、座敷のやうに掃きよめられた大沙漠に踏み込んで、その姿が蟻のくらゐになるまで見送つてゐたといふものもある。そして、僕は、僕の友人の一人が客死した、パリの施料病院の病棟のうそ寒い長廊下の先のほうをこつこつあるいてゐる彼の背なかをみたことがあるのだ。決して、病人になぐさめや、祝福をあたえるためではなく、そこだけが、こころやすらぐところだからといつた

夜霧のおりたキャベツ畑のなかを、しよんぼりとうなだれてあるいてゐる彼を、人はみかけた。だが、誰もそのときは気づかない。あとになつてから、彼ではなかつたのかと気がかりになるのだった。湖水のへりで、棒切れで貝を掘りながら、ものおもひにしづんでゐる彼をみたものもある。きれいに掃清められたお座敷のやうな沙漠に、ふみ入ってかえらない彼の蟻のやうな姿や、海藻のあひだに揺られて、ただよってゐる龍の落とし子のやうなシェルエットを、人は、あるとき夢にみたり、ふと心にうかべたりするにちがひない。(「草稿」、36頁)

彼が精神病棟のうそさむい長廊下をあるいてゐるのは、病人になぐさめや、祝福をあたえるためではない。そこだけが、こころのやすまるところであるからである。(「草稿」、38頁)

案配であつた。

- 264 『神さまといふのは、[もしかしたら→] ひよつとしたら、偶然とか、寸前尺魔とかいふ[類る→]ほどのことを、人がそうよぶのではないでせうか』
- 265 いけない僕の癖なのだが、素直に考えやうとはせず、しやくつてみねば気がすまないといふのは、西洋流の懷疑精神を見ならつたのだ。眞實はあじきないものだ。眞實ばかりをあばきあつてゐたら、しばらくも社會生活はつづかないと、ロシュフーコーも言つてゐる。ここ^{ヤク}幾日か、行動を一つにして、氣のおけないあひだ柄になつてしまつたのでキリストにむかつて、僕が、そんな質問をすると、
- 266 『さあね。あんたが偶然と考へなさることでも、そこには、[おもひがけない→] 腹のしれない神の攝理、といつてわかりにくければ陥筈といつてもいいが、おもひがけない原因、結果がはたらいてゐるかもしれないのだから、氣をつけなければいけませんよ。それに、[ここでの→] ここだけの話だけれど、言葉などかけられて魅入れたりすることのないやうに、なるたけ神などは、近よらないやうにすることですよ』
- 267 迷惑さうな笑ひをうかべながらキリストは、いいにくいことを言はねばならない、うかぬ顔
- 人が眞實ばかりをあばきあつてゐたら、しばらくも社會生活などつづくものではないとロシュフーコーは言つてゐるが、ひとりのくらしだつてたちゆくまい。(「草稿」、35頁)
- ここいく日か、行動を一つにして、氣のおけないあひだ柄になつてゐたので、キリストにむかつて僕がたづねると、(「草稿」、39頁)
- 『さあね。あんたが偶然と考へることでもそこには、おもひがけない神の攝理がはたらいてゐるといふことから、氣をつけないとはいけませんよ。……………それに、ここでの話だが、話しかけられたりしないやうに、なるたけ神には近づかないことですよ』(「草稿」、39頁)
- 迷惑さうなうす笑ひをうかべながらキリストは、うかぬ顔つきで忠告する。そこで、また、僕はちがった質問

つきで僕に忠告するのだつたが、氣働きののろい僕は、無遠慮に、また一つ別の問ひを出す。

268 『どうなんでせう。神さまは、御心のうちで、廿世紀の文明をお憎しみで、これほどまでの人間の増長をゆるしておいたことを後悔なさつておいでではないのでせうか。ノアの洪水とか、ヤーウエの硫黄の火とかを、予定してゐらつしやるのではありませんか。それとも、これは伺つていいことかどうか知りませんが、全能の神の力をもつてしても、神を見放した人間の危険な独走を、どう食ひとめるべきがないといふことでせうか』

269 それから一息ついて、また、僕はつづける。

270 『教えてください。主よ。僕たち日本人はあなたの神について、ほんとうは、なに一つ知らないのです。知つてゐることは、あなたの神が、西洋人の福祉利益のまもり神で、彼らに優越感と勇氣を与え、開明と自由正義の名で、わがまま勝手に世界を荒しまはるやうになつた、非理非道の共犯者だといふことだけです。木つ端のやうに燃えやすい日本人は、見境なくどんな神にでも帰依しますが、木や竹でつくつた家とおんなじで、

を一つする。』(「草稿」、39頁)

『神さまは、こころのうちに、人間の文明を後悔されて、おしまひにしたいと望んでおいでではないのですか。さうおもつてもいまでは、神さまでも、手に負えなくなつてゐるのではありませんか。』(「草稿」、39-40頁)

西洋人はいつでも征服者で、神を共犯に抱きこんでゐる。それにくらべて、自然に服従するならばししかもつてゐない僕たち日本人は、神については、まったく無縁で、悪魔と神の区別すらほんとうは知つてはゐないのだ。(「草稿」、40頁)

灰しかあとにのこらないので
 す。自然に服従する習慣しか、
 もともともつてゐないのです。
 僕たち日本人には、神を理解で
 きても、あるひは感じとること
 ができるとしても、神の肌であ
 たためられてじんわり汗ばむ
 やうな抱擁感は、まつたく味
 はつたおほえがないのです』

- 271 キリストは、それに答えるか
 はりに、黙つたままで、ゆつくり
 音をふつてゐるだけで、そんな
 な音を吐く僕の^なことを、憫んで
 いるのか、蔑^{さげす}んでゐるのか、
 それは、僕にも測りかねた。

五 — 恩師グッドレーベンに〔呈ぐ→〕捧ぐ。

- 272 比金欄の旗雲のうへで、疝高いが甘い音いろの〔唐人笛→〕唐人喇叭が鳴る。
- 273 あかん坊が〔ゐるのだ。→〕あそんでゐるとみえる。あかん坊にならない以前の、あるひは、永遠のあかん坊のむれが、薔薇いろの、しゃぼんの泡のやうなからだで、かるがるとふれ、右に、左にゆれて、風にふきもどされて、あちらに散つては、また、こちらにあつまる。
- 274 人のぞみのうちで、いちばん
 純粹でいちばんはかないのぞ
 みは、もう一度、あかん坊にか
 えりたいのぞみである。到底も
 どれさうもない遠くへきてしま
 つてから、アルツイパーシェフ
 の『サーニン』も、アドルフ・
 ヒットラーでさえも、そんなの
 ぞみをもたなかつたとは言ひき
 れまい。考えるだけでも、胸の
 いたくなることだが。

人は、神とはあかん坊のことだといふ。神になりたいのが人のぞみとみえる。それ故か、誰もがもう一度、あかん坊にかえりたい願ひをもつてゐる。（「草稿」、42頁）

穴のあいた鉄兜を、顔にのせ、泥のついた長靴を穿いたあかん坊。そのあかん坊は、レフ・ダビドキッチ・トロツキーと名のるかもしれないし、ゆく先、ポール・アンカか、廃兵か、子だくさんな門番か、なにになるかは、それこそ、考えるだけで胸がいたくなることだ。（「草稿」、42頁）

275 ムッシュウ・グッドレーベンの出生地は、アルサス・ロートリンゲン〔だ。→〕である。ムッシュウ・グッドレーベンの教えるフランス語は、それだからアルサス・ロートリンゲンのなまりが〔ある。→〕あつてもしかたのないことだ。いかなるおぼしめしがあつてか、神さまは、あなたをえらんで、ムッシュウ・ポーマンや、ムッシュウ・ゼロームらといつしよに、さいはての島⁴⁴⁴國日本につかわされたのでせう。

ムッシュウ・グッドレーベンは、大工さんのようなごつい両手を、ごしごしとこすりあわせて寒さをしのぎ、肩をすぼめながら、中學校の校庭の煉瓦塀に添ふて、さくらの木のしたを行つたり、来たりしてゐた。

ムッシュウ・グッドレーベンはじめてみたとき、少年の僕は、西洋の繪で見たキリストとそっくりだとおもつた。肩にさがつた毛が、刈り上げになつてゐるのと、その毛のいろが赤毛なのが、キリストとちがつてゐるだけで、柔らかなおもざしや、すぐりいろのふかくて、やさしい瞳が、いづれを鏡にしたのかわからないほど、よく似てゐた。

そして、小心なために、反覆しやすい弟子たちがキリストを苦しめたやうに、僕たちも、あのやさしい人を当惑させ、〔もてあまさせたものだ。→〕あの人のところをきづつけたものだ。それがあの人の試練だつたとしても、~~糞~~糞いひねこびた、三白眼の、氣ごころのしれない日本の少年たちの早熟で、粗悪な魂に、どんな愛情がもてただらう。

神さまのまえに出たら、『あの藪蚊の多い、きたない土のうへで生きてゐる種族は、あ

ムッシュウ・グッドレーベンは、ごつい大工さんのやうな手をごしごしとこすりあわせて寒さをしのぎながら、肩をすぼめてみせる。神のおぼしめしは廣大無辺で、測り知らうとしてはならない、といふころをしめす素振りにほかならない。（「草稿」、43頁）

少年の僕は、ムッシュウ・グッドレーベンをキリストとおもひちがえた。それほど、その柔かな倣がよく似てゐたのだ。（「草稿」、43頁）

神よ。このじめじめした藪のなかで生きてゐる人間は、あなたのおつくりになつた人間の子孫ではござい

あなたのおつくりになつた人
間の末裔ではございません』
と、おもつた通り、そのまま
報告すれば、それでことは
終つたであらうに。

ませんと報告すれば、それですむだ
らうに。(「草稿」、44頁)

こともあろうに、ムッシュウ・グッドレーベンは、弱さを弱さのままで育てる〔試
練→〕 勞苦に耐えて、おおかたの生涯の大半をこの辺土ですごし、蛸坊主のポーマ
ンや、梟のやうなゼロームよりも、はるかにながいの年月を生きのびて、いまはしづ
かに老病の、その細^き長いからだを、老いたる紅鶴のやうな足をたたんで、窓か
ら港と海のけしきのみえる病院のベッドに身を横たえてあるといふことだ。彼こそ、
生きながらあかん坊に〔返る→〕かえつて、ベッドからそのまま天にのぼる、第一
の〔資格のあるものとして。→〕資格をもつた人として。

276 ムッシュウ・グッドレーベンよ。たしかにあなたは、この僕よりも神さまのお膝
元ちかくに^あられる。

すでに九十歳にも〔なつた→〕なるあなたには神さまのおめしを待つよりほか
にかくべつの用事も、なささうだ。

いざ、おめしとならば、あなたはロケット砲よりも〔はやい速度で→〕すばやい速
さで魂に翼をつけてとんでゆくでせう。たとへ、万一神さまがご不在でも

ムッシュウ・グッドレーベンよ。たばこの粉のやうなその顎^{ひげ}髭で蔽はれた、あな
たのその頬には神さまよりも、悔恨の^あ痕がない。

あなたの、そのくちびるは、神の裳^{もすそ}にしか接吻しなかつたしあなたの男根も、用な
しですんだ。

一度も穢されたことのないそれをローソンかはりに、おし^た立てて、くまなく、
天界のすみずみまで、神さまの居所をおさがしなさるといい。

六

277 『わたしのやうなものがなまじ居つたため、地球の人たちに、

278 苦しみの種を^ま捲いたやうな気がしてならないのだが……』

- 279 めつきり氣の〔張りのなくなつた→〕弱くなつたのがわかる、神の子が
 280 そんなことばを口に出す。
- 281 『それは、たしかに、〔人は→〕人間が、〔壮やかで→〕強健であられたかもしれませぬね』
- 282 だが、僕は、さうとは言はず、裸で横になつてゐるキリストのそばで、
 283 注射のアンブルに、^{やすり}鑿をあてながら、きいてゐる。
- 284 あれから二千年ちかくも〔日→〕年月がたつといふのに、まだふさがらない古瘡
 の口をあいた
- 285 〔肋骨→〕あばら骨のとび出した、洗濯板のやうな、〔うすい→〕うすべつたい胸。
- 286 十字架からかつぎおろすまえに、兵士の一人が、鎗でとどめをさしても、
 287 水しかながれなかつたといはれる。その瘡ぐちから
 288 血うみのついたボロを、ピンセットでつまみ出したあとへ、
 289 新しいガーゼを押しこみながら、僕はたづねた。
 290 『この瘡、いまでも、まだ、いたむのですか』
- 291 『さうです。わたしのことを、誰かが忘れずにゐるかぎり、
 292 その人の良心のいたみにつれて、この瘡も、いつしよにうづいたものでしたがね』
 293 梅鉢形の紙を貼つて、割れ目をつないだガラス窓の、そとはじくじくな〔天気→〕
 空もよう、
- 294 肉腫や、水虫、脚氣、〔アル中や栄養失調の→〕萎黄病のうら枯れた町が、ひつそり
 りとこちらの氣配をうかがつてゐる。
- 295 だが、壁は、板張り、〔ぼろ畳→〕琉球畳のうへに、鐵のベットが一台据えてある
 きりのこの部屋は、
- 296 かざりらしいものが一つも 外にもまけず、陰氣で、しめっぽ
 なく、からんとしてゐて、 く、黴やしみだらけで、そのうへ、
 家の道具らしいものはなにひとつ
 なく、索漠としてゐる。(「草稿」、
 49頁)
- 297 そのベットの横に、この男の手提鞆を縦におこして、そのうへに僕が腰をおろし、
 298 〔こわれた笛→〕鳴らなくなつた笛のやうな裸を、しみじみとのぞきこむ。
- 299 ずいぶん〔残酷な→〕みじめな光景も〔みてきたし→〕見慣れてきたし、じぶん
 でも、

- 300 むごたらしい目にあはされたおぼえのあるつもりの僕なのだ
 301 が、これほどあてつけがま こんなにまであてつけな『みじめさ
しい、報復のためにでもへし の象徴』^{シンボル}みたいなものに、出くはし
折り、へし曲げたやうな たのは、はじめてだ。(「草稿」、50頁)
- 302 いたましい肉体のなれの果
てを、この目でながめたこと
はなかつた。
- 303 あるへい糖のやうな〔振くれた→〕板ぢまがったこのからだの、
 304 さて、どこから手をつければいいものやら。
- 305 人類の苦しみを、身一つに^{かたつて}代つて、ひきうけるなどといふ、
 306 そんな法外な〔考え→〕おもひつきが、だいたい、〔まともではなかつたのだ。
 →〕まちがひのもとなのだ。
- 307 鼠算でふえる人間の繁殖力 そのうへ、日に、月に、苦しみの
と、いつしよにひろがる苦悩 かさは大きく、めかたは重く、一人
のかさを計算しなかつたの の人間の肩の荷は、百人かかっても
で、 のけてはやれないのだ。(「草稿」、
- 308 その膨大な肩の荷が、彼を 50頁)
こんなにしてしまったのだ。
- 309 そのうへ、自然の掟に逆らつて、千年以上も〔生きてきた→〕ながらえたからだは、
 310 屍蠟をみるよりもぶ氣味なものだ。
- 311 キリストよ。あなたは、頭から足先まで、変形であり、病患の巢なのです。
 312 ラザ、トリポリ、リオからキプロス、アロン湾から平壤まで、
 313 泡つぶと斑点でぶよぶよのこの皮膚の、どこ一つとして、
 314 いのちとりの患部とならない部分はないのである。
- 315 〔ふたつ→〕両のてのひらと、足の甲にある釘のあともいつまた、火を噴くかされ
 ないのだ。
- 316 しつけた〔綿火薬→〕火繩に火を〔つけるのは→〕よぶのは、政治や、野心〔か
もしれないが→〕にまちがひないが、
 317 爆発するのは、弱い人間どもの、もつとも弱い心情の鬱積物なのだ。
- 318 キリストよ。あなたの無類なつよさも、弱さに徹したあなたの無抵抗の〔つよさ
で→〕たまもので、
 319 乞食、前科もの、浮浪人〔のみかたであるからです。→〕がいつしよだからなの

です。

- 320 あなたをさんざん利用した上、平気で裏切る小ざかしい連中にとつて、
 321 あなたの無慾と、底しれぬ慈愛がつけ目だが、〔内心では→〕こころの底では、
 322 あなたの弱い仲間たちが、そら怖ろしくてならないのだ。
- 323 『じぶんがみながつたほうがよかつたらうなんて、
 324 あなたらしくもない、いやがらせにもなりませんよ。
 325 あなたが〔ほんもの→〕正真正銘のキリストだといふことを、疑つてなんか
 326 るものですか。その證據は、
 327 あなたがいつもうらぶれた姿で、いつも悲しげに見えることです』
- 327 『そんなに気にしないでください。〔いつものこと→〕常住のことなのですが、
 328 そう。もうよつほどながい以前から、わたしは、
 329 すこしばかり疲れすぎてゐるといふだけのことなのですから』
 330 氣ぶつせそうに、そう言つて、キリストは、
 331 痣のついたやうな青黒い、そのおもたい〔眼を→〕まぶたを^{かへ}伏せる。
- 332 それから、しきりに身をもがいて、上半身を起きあがらうとするキリストを、
 333 おさえつけながら、僕は、言ふ。
 334 『しづかに、〔おやすみなさい。→〕やすんでゐらしゃい。なんにも考えないで。
 335 さしあたり、パントボンを一本うつておきますから』
- 336 ^{くち}蜘蛛の^か巣かびや、こな^か苔〔をふいた→〕でよごれて、酸乳のやうに底でと
 337 がつた肌
 338 灸のあとのある天突や、肩井の脈どころ、虚数の窪みや、なぞえになつた『死』
 339 のスロープを、
 340 僕の指先がさぐつてゆき、押したり、また、はなしたりした。
- 339 そして、彼の二の腕に、注射針を突き立ててみたが、
 340 しこりになつた皮膚の固さが、はね返し、五へんもやり直して、
 341 針先が折れて、くすりがこぼれたりしたあとで、やつとうまくいつた。
- 342 僕は、ほつとふとい息を吐
く。遂に、挫^{くち}けずにそれを
為遂げた。
 僕は、ほつとふとい息をつく。“遂
 に、挫けずそれを成就げたのだ”さ
 うだ。額に粒々な熱汗をふきながら、

- 343 そうだ。額に、粒々^{つぶつぶ}な汗を
ふき出しながらしとげた
のだ。
- 344 ——それにしても、いつ、
どこで、どんなきっかけでキ
リストは、麻薬などをうちは
じめたのだらう。
- 345 しびれさせておきたいことが、山ほどあつたのだらう。
346 神の子よ。
347 だが、これは、僕のやうな異教徒でなければ、してあげられないことなのだ。
348 西洋を改宗させるやうなものを、東洋は、麻薬以外に、なにももつてゐないので
はあるが。
- 349 かさねがさねも、人類も苦しみを一手で引きうけやうなどといふおしやらくは、
350 考えるだけで、実行できることではない。
- 351 それは敵につけ入らせる口 　　　　　それは、つけ入らせるいい口實だ。
実になるばかりでなく、 　　　　　（手のこんだ悪企みができるのは、
352 悪企みの手数をおぼえさせ 　　　　　文明人であればこそだ。）（「草稿」、
ることで、現代人を墮落させ 　　　　　54頁）
る結果にもなるのだ。
- 353 改めて、僕はながめる。大地の奈落をおもはせる神の冷酷から、人間をかばふた
めに、
- 354 いまなほ、身を盾にして、さまよひつづけてゐる叛逆人のなれのはてを。
355 高貴な^聖たましひをもちながら、人間の子に生まれてきたばつかりに、どんな下
素どもとも
356 十分かはつたところのない、そのあかはだかを。
- 357 そのからだが荒廃して、〔沙漠→〕瓦礫場となつたそのからだを、
358 胡文豹や、ヒンズー・タミールの坡止場人足や、山地のモイ族や、ハイル・シラ
シエ陛下を裸にむいて並べても、
- 359 〔別に→〕どこに一つ、ちがつた仕掛けはないのだし、
360 心臓のかはりに、オルゴール入りの目ざまし時計がはいつてゐるわけでもない。
361 そして、貧相な僕のからだ 　　　　　そして、さつき僕にもついてゐる

- にも、お愛敬についてみると
 362 いったほうづき提灯が、
 363 煤けいろしたちぢれ毛のな
 364 かにもぐりこんで、
 365 わづかにそのあたまをも
 366 たげてゐる。
 367 あなたの思想が左むきだと思ひ込むものが多いのに、
 368 あなたの斜塔はすこしばかり、右よりにかしいである。
- 369 [ふやすためにも→] 生殖の目的にも、快樂のためにも、[使はず、→] わづらは
 370 せやうとはせず、
 371 しまひなくした金貨ほどに
 372 も未練氣なく、おそらくあな
 373 たは、
 374 368 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000

- べりを〔してゐた。→〕 つづけてゐた。
- 380 キリストの足もとに置いた手提げ鞆のうへには、一茎の白小菊。
- 381 彼は、出発しなければならなかつたし、僕もまた、
 382 それを引き止められないし、引き止めてみてもしかたのないことがわかつてゐた。
 383 そして、どこの町角へいつても、きれいな悲しみが
 384 噴水になつてふきあげては、風にちらされてゐた。
- 385 僕は、手にふれた普及本の〔『古今和歌集』→〕『今昔物語』を〔とって→〕ひきぬいてばらばらとめくりながら、
 386 恋人の放屁をきいて、この世のはかなさをおもひ知り、
 387 その場で出家遁世した、このくにのむかしのこころやさしく、
 388 愛情こまやかな貴公子のことをはなしてきかせたが、
- 389 キリストは、持ちおりのする〔ギボンの『羅馬衰亡史』→〕『葉草論品講座』を手うけたままで、
 390 けつたい至極な僕の話を理解しようとして、〔しかつめらしく→〕くしゃくしゃと顔をしかめてゐた。
- 391 『こころまづしいその人は、 『心のまづしいものは、しあわせ
きつと天國へゆけるとおも ます。』〔草稿、59頁〕
ひますよ。
- 392 日一日と航海術は進歩しつつありと、ラテンの詩人はうたつておましたが、
 393 さんすうしいへの海路は、日一日と遠くなるばかり〔とおもひますよ→〕です』
- 394 『ほう。それでは、あなたもいまでは、天國が近くにあるとは、考えていらつしやらないのですね。
- 395 人間は、むしろ、地獄の諸 『さすがのあなたも、底しらずな人間の欲望に責任をもつことをお止めになつたらしいですね』（「草稿」、60頁）
条件のなかで生きてゆける
やうに、適應性ができてゐる
のではないのですか』
- 396 『〔待ってください。→〕 そんなに氣短にあきらめないでください。また七でも優秀な新兵器が、またぞろ生まれても、
 397 それでこの世が終りになるとおもふ人のやうに、
 398 〔氣がはやい。→〕 それは、すこし早計すぎますよ。

- 399 それに、どんな場合にもじぶんだけは、あぶないところで生きのこれるものと考えてるのが、
- 400 格別樂天家ではない、それが人間といふものでせうよ』
- 401 救世主の顔を僕は、おどろいて眺める。
- 402 『じぶんのことしか考えないからといってその人をせめてはなりません。
- 403 じぶんがあつてこそ、他人もあり、神もあるのですから。
- 404 それに、人は誰でも、じぶんを善人とおもつてゐます。そして、悪人をゆるしておけないと考えるのです。 『善人がゐて、悪人を目の敵にするかぎり悪人も、善人と戦かはねばなりません。 善人をゆるしておけないからですよ。』（「草稿」、60-61頁）
- 405 悪人たちもそんな善人のおもひ通りになつてはゐられません』
- 406 キリストは、〔僕とは別の考え→〕じぶんの考えにふけりながらぶつぶつぶやいてゐる。
- 407 鼻の頭に立皺をつくり、小狡い微笑をうかべながら僕は、
- 408 あたりに人がなく、閑散なのを見すましてから、言ふ。
- 409 『三十歳までのあなたの行状が、さつぱりわからないことから、世間には、 『あなたの三十歳までの行状がな
- 410 そのあひだ、あなたが放蕩無頼で手がつけられなかつたのだなどと、 一つたつたはつてゐないのは、悪魔とのたたかひや、苦しい修行のあけ
- 411 とんでもない臆測をふりまいてゐるものがあるそうです。 くれだからとわかつてゐるのに、手のつけられない極悪者だつたなどと、世間には、とんでもない臆測をするものもおります』（「草稿」、61頁）
- 412 悪魔の誘惑とのたたかひや、苦しい修行のあけくれで、
- 413 どんなに清淨潔白で、勇猛

精進のあなたの日々だか、わ
かりきつてゐるのに。』

414 『待つてください。その噂
が、まんざら根のない言ひが
かりとも言えないのです。

『さうですね。まんざら根のない
言ひがかりでもありません。お話し
ませうか』（「草稿」、61頁）

415 おのぞみならば、話しても
いいですよ』

416 キリストは、はにかんだ、処女のやうな微笑を泛べていふ。

417 『きかせてください。どんなことでも。あなたの迷惑になることを、僕は、

418 なに一つ、誰にも話したりする氣づかひはありませんから』

419 『それならば、あるきながら、ぼつぼつ、はなしませう』

420 ふたりはつれだつて、小商店が〔ひっそり並んでゐる→〕額を寄せあつてゐる通
りをすぎ、

421 雨でさんざん洗ひながされて、粗肌の出た、〔白けきつた砂地のやうな→〕白つぼ
けた砂礫地を、

422 有刺針金のかこひに添つて、どこまでもあるいた。

423 そこらへんは、もと黒人兵の兵舎のあつたのをとりこはしたあとの空地で、

424 朝鮮戦線から飛行機ではこびかえつた戦死体の、西洋人を焼く甘いにほひが、

425 [いつも→] いつになつてもそこに停滞し、海風に吹きかえされて、

426 よし萱のたぐみの雑草の穂といつしよに、なびいてゐたものだ。

427 なにかの血らしいものた
まつてゐる砂地の水たまり
からとび立つて、

血の瀧水からとびたつて、電柱に
止り、針金のかこひをつたつて、雀
の群が、さむざむとした雨ぐもりの
空にとんでゆくのを見送りながら、
キリストはいう。『めづらしい話は
なにもありませんよ。むかしがいま
より文明でもなく、いまが、むかしよ
り野蛮なわけでもない どの時
代にも、氣狂ひどもが横行してゐた
とおなじやうに、わたしも、他人の
人たちと、負けず、劣らず人間なの

428 電柱に止り、針金のかこひ
をつたつて、雀の群が、

429 さむざむとして雨ぐもりの
空の、どこかあかるんだ眞珠
いろをもとめて、とび散つて
ゆくのを見送つてから、キリ
ストはいふ。

430 『みやげになるやうなめづ

- らしい話は、なにもありませんよ。それに、
- 431 むかしがいまより文明だつたわけではないし、いまが、むかしより野蛮だといふわけでもなく、たゞ、
- 432 いつの時代にも、氣狂ひどもが横行してゐました。
- 433 このわたしも、他の人たちと負けず、劣らず、人間といふものだつたのです』

ですよ』（「草稿」、63頁）

八

- 434 『わたしの生まれたところといふのが、〔くだらない→〕やくたいもない貧乏村で、
- 435 叩き大工の義父ヨゼフ、この人は、底ぬけのお人よしでした。
- 436 母マリアは〔痴呆で、→〕うす馬鹿で、男ずきで、誘はれれば誰とでも平気で寝るので、
- 437 誰が父ともわからない、このわたしが生れたといふわけです。 父のわからないわたしを生んだといふわけです。（「草稿」、64頁）
- 438 ローマ人の血も入つてゐるやうです。このからだには、古代フェニキア商人の冒險好きな血や、 おそらく、こすづるいローマ人や、孤独好きな東洋人の血が、このからだにながれてゐることでせう。（「草稿」、64頁）
- 439 ダマスコの狡智、孤独な東洋人の血など、ずいぶん雑多な血が混つてながれるやうなのです。
- 440 キリストはまるで他人ごと他人事のやうに、淡々とかたる。
- 441 悪童どもをかたらつて、癩者の順礼宿から銭や食物を盗みだしたり、 それから、旅人の宿舎から物を盗んだり、その旅人を母のところへつれてきて稼いだりした、早熟で、ひねくれたかせ餓鬼のころのことを、それから、女
- 442 まぐさ小舎の母親のところ

- へ旅人をくわえこんで、駄賃^{だちん}を
せしめたりした、はるかな餓鬼
のころのことや、
- 443 青二才といはれる年頃には、
居所もさだまらず、
- 444 涙もろい女連から騙しとつ
た小金で、ばくちをうつてある
いたことなどを。
- 445 やうやく神ごとに熱中して、
あひてかまはず議論をしかけ
たり、
- 446 わたりものの乞食行者におだ
てられて、じぶんをメシアとお
もひこんだりしたが、それにも
むなしさをおぼえて、
- 447 人生をはじめからやり直す氣
になって、星影まばらな荒野に
ひとりでさまよひ出たときの
こと、
- 448 そこでどんなことを考え、ど
んな誘惑に、どんな恐怖に曳き
づられ、
- 449 くらやみのころの底の水た
まりにゆれる小さなともし火
で、いったいどんなものをさが
し廻ったかを話してくれた。
- 450 モーゼスよりも、またイズラエルの子孫、アロンの子の祭司達、エレアザルとイ
タマル、その^{ほか}他の誰人よりも、
- 451 近々と神を見て、話しかけやうと、焦り、いどみかけ、
- 452 神の注意をこちらへむけるために、その全能をからかったり、山鼠、鴉、くちな
わなど穢れたものとその血を献げ、
- 453 神の鼻毛をぬき、耳をひっぱるために、髻をぬいたりして、神をためす、
- 454 蕨とかぶれあることばで言ひかけた。 ぢりぢりするのを待ってゐた。(「草
稿」、65頁)
- 達を騙した金でばくちにふけり居所
もさだまらずわたりあるき、あひてか
まはず議論をふっかけて、人に誇^{ほこ}ること
にも、やうやくむなしさを感じ、星
影もない荒野にさまよひでたころの
ことを。また、そこでなにどんなこと
を考え、なにに心を曳きづられ、くら
やみのなかでゆれる小さな燈し火で、
なにをさがし廻ったかをはなしてく
れた。(「草稿」、64-65頁)

- 455 撫で肩で、細ながい首のキリストは、痰と血を咯きながら、
 456 足の三つある太陽と、赤い岩石に挑戦した。
 457 肺臓にむらがる〔蠅→〕刺蠅とその蛆と。背なかで土にころげまわる豹のやうに
 458 身うちを焼けひろがる野火。追ひはらひ—じぶんをとりしづめ、じぶんを〔助け
 だす→〕救出することできたくたになりながら彼は、
 459 人間と神の癒着部をさぐりあ 昏々とねむった。（「草稿」、66頁）
 てた。
 460 それから、蛇捕りが蛇をおさえるやうにして、つかまえてきては手なづけた人間
 の愛情を、
 461 十日十夜、つくつくと煮つ 其の猛毒もいっしょに煮つめて
 めた。 は、味はふことに慣れた。（「草稿」、
 66頁）
- 462 無花果の蔭ふかい枝のした、うつすらと白い頭髪かみのやうに、白びびたさびた湖水みづのほとり
 畔りのわが部落にかえつたとき、キリストは、
 463 羊飼ひの杖を手にしたからだ一つで、
 464 人間の弱さと、すべての抵抗のむなしさだけを、みやげに抱きかかえてゐた。
- 465 キリストは、それから、世に キリストは、それから、たよる男に
 見捨てられた女たち、妓女あそびめや 捨てられた女や、身もちくづした女、
 466 肉親の兄弟や、となりの夫に 寡婦や、醜くて顧られない女、はじめ
 陰所かくしどころをあらはした罪で神か から愛されることをしらない片輪な女
 ら罰せられた女、たよる男に死 まで、（「草稿」、67頁）
 なれた女たち、
 467 子をうまぬ腹、のませぬ乳の 子
 石婦うますめ、醜くて顧るものない女 石婦、醜くて顧るものない女
 や、愛されるのぞみをもつたこ や、愛されるのぞみをもつたこ
 ともない片輪女まで、
 468 すりへらされた晒れ貝のやうな、そんな女どもを、
 469 わけへだてなく、ていねいに洗つてやつた。
- 470 その女たちをてのひらにのせて、もう一度つやを出し、
 471 もう一度すき透らせるためには、
 472 粗略しつろにせぬやう、〔わづかな→〕すこしの誇りも傷つけぬやうにところをつかは

- ねばならなかつたし、
 473 律法や、^{おほ}長のことば、とき
 には人倫さへもふりかえつて
 むるひまがなかつた。
- 474 つぶつぶと鳥肌立つた女た
 ちのまるい尻たぶ。おくれ毛
 のそよぐ瘦首から肩へ、
 475 あかぎれのやうに割れた陰
 所まで、くまぐまでもなめ
 廻し、
 476 彼女たちの古瘡や、なまあ
 たらしい瘡をなおしてやつ
 たものだ。
- 477 女たちの重ね^{せいろ}蒸籠からたち
 のほる分泌物の、酸っぱいや
 うな湯氣に蒸され、
 478 虚無的なけだるさの、泥の
 やうななめらかさのなかで、
 うとうとしながらキリストは、
- 479 彼がゆめみる平等無差別のうちに、二十代から三十代への
 480 青春の月日が、砂に吸はれる水のやうに^{あぶく}泡立つて
 481 むなしく吸い込まれてゆく音をきいた。
- 482 やさしくされた女どもの、たがひの嫉妬と〔獨占→〕独占慾とが、遂にキリストを、
 483 ポンシウス・ピラトのまえに立たせる〔こと→〕仕儀となつた。
 484 『でもね』とキリストは、はつと熱い息を吐いて言ふ。『女たちのそんなひどい裏
 切りにしても
 485 折角のわたしの愛情を、〔無臭、無味な抽象の世界→〕真空の世界に放散させてし
 まつたあの神學者たちほどには、
 486 わたしをがっかりさせることはありませんでしたよ』
- 律法や、与論に拘泥せず、ときには、
 人倫をかえりみず、良心の聲もききな
 がすよりほかはなかつた。〔草稿〕、
 67頁)
- 搦られた鴉の裸かな脊椎。精液く
 さい、ぜいぜいあえぐ喉。うすうす
 と生えたおくれ毛のゆるる、寒さう
 なえりもと。ひび割れたあかぎれの
 やうにひらいた陰部まで、小娘たち
 のくまぐまでもなめ廻し、あたら
 しい瘡や、ふるい瘡をなおしてやつ
 たものだ。〔草稿〕、68頁)
- 女たちの正体もなくなめらかな、
 赤泥、青泥をこねまはし、彼女たち
 の重ね蒸籠からたちのほる分泌物の、
 なまあたたかい蒸發の、虚無的なけだ
 るさのなかで、うとうとしながらキリ
 ストは、〔草稿〕、68頁)

- 487 そこから埤頭がうすぼけて霞んでみえる埋立地の、すがれた草土手に立つて、キリストは、
- 488 手さきにふれる枯草の、莢になつた實を、指のはらで一つづつつぶしてゐた。
- 489 『冷酷無残なことですね』と僕はおもわず口走つたが、
- 490 それがなんにむかつて言はれたのか、じぶんでもわからなかつた。
- 491 それがたとへはつきりと
にむかつて言つたのかわ
からなかつたにしろ、たしか
に、そのとき僕がづつしりと
受取つた
- 492 方途もつかない重たさは、
それは、
- 493 男の宿命、女の宿命、それ
どころか、うしろにしよつた
いつさいの過去の歴史の重
たさばかりではなく、
- 494 これから生まれてくること
を約束されたもの、まだされ
てゐないものまでぎつしり
つまつた未来の
- 495 想像もつかない先までふく
めた人間生活の
- 496 総量を浮きあがらせてみせ
るものであった。
- 497 だが、誰が、絶望なしで、
この重量をうけとめること
ができるだらうか。
- 498 死ぬことを末ながく拒まれ
たキリストひとりが、
- 499 生々世々しょうじょうよよ、この寂寥しやくりやうの前に
立たされた姿をみて、おもわ
ず僕が叫んだのだ。
- 500 他でもない。別離が、出発
のときが、すぐそばに近よつ
- 『あなたの愛の教義のことですよ。なぜといえば、平等の愛なんて、誰一人承服はしません。じぶんのからだを蠅にまかせることです。もっとも、きなくさい現代では、蠅にまかせることも、油蟲こきぶりの餌食になることも、面目上こころかはりがないことを、誰だつて知ってゐるやうです。
- ニヒリストですって？ 冗談じゃありませんよ。日本には、ニヒリストにならねばならない深刻な理由はなにもありません。日本人といふのは、気分だけのしめばいい人間共です。そつとしておいてくださるんですね。それから、ごらん下さい。セメントや、鐵くづや、石炭殻や、そこらをがらくたで身うごきできないところにしたのは、みんな、神さまのさしがねのつもりになって、なんの自責もなく、つまり、餌と鼻面をあてがって鞭でしこんで猿たちを改宗させやうとおもひついた、あなたの小羊と名のるハイエナや、秃鷹ども、傲慢で、悪知慧に長けた、偽善者の、あの西洋人どもですよ。』
- 西洋人よりも、もっと酷薄で、こころゆるせない東洋人たち。猿はもっともみにくい動物だが、なんとわれわれが似てゐることかと、誰かが言

- 501 てきたのを察知して、
はなれることではじめては
つきりわかる、彼の本来の姿
から僕が、
- 502 あるひは逆に、彼の住む世
界の風景をかひまみたのか
もしれない。
- 503 そのとき、キリストは、茫洋として、草薺くさほうきのやうに立つてゐた。
- 504 その眼は、かなしげに海のほうをながめてゐた。沖あひは、霧がふかく、しけで
みるらしい海。これは、海の死顔しにがほだ。芒硝と、アンモニウムの海。その海には、海
の毛蟲や、ゆうれい蜘蛛しかすんでゐない。
- 505 だが、キリストの眼は、もっと遠くのものに奪はれ、
- 506 出発を考えてゐたのだ。彼は、はやこの土地にとどまる意こころなくそうだ。おそらく、
僕らが、夢のなかででもなければゆけないやうなところのことを〔さがしもとめて
ゐるのだ。→〕考えてゐるのだ。
- 507 引き止められないとわかっ
てゐるあひてに僕の妬みぶ
かい、おとなげなさか
- 508 こころにもないやがらせ
を口にする。
- 509 『くれぐれもお氣をつけく
ださい。阿瑪港あまかおや、呂宋るすんはと
もかくも、
- 510 海防はいほんも、順化ゆえも、これから
戦争のまんなかですから、
- 511 それに、あなたを利用する
連中が、どこにでもうようよ
してゐます。それは、ほんと
うです。この僕だって、はじ
めはその氣でゐたのですよ。
- 512 二十代のあなたのスキャン
ダルを本にすれば世界のべ
- ってゐるがわづかに人間のとり柄
と言へば、そんなじぶんを嫌悪で
きることくらゐかもしれない。
〔草稿〕、69-71頁)
- とり逃がすのが惜しいのだ。それ
から、僕は、意地わるをした。これ
までの好意を無にするやうな、自尊
心を傷つけることを放言した。〔草
稿〕、73頁)
- 『くれぐれも御無事な旅を祈って
おります』と僕は言った。〔草稿〕、
73頁
- 『それに、あなたを利用する人間ど
もに氣をつけてください。どこにで
も、その連中はゐるのです。現にこ
の僕だって、あなたに近づいたはじ
めの目的は、あつかましいマスコミ
にあなたをうるつもりだったので
す。〔草稿〕、73-74頁)

- 513 ストセラーですし、
テレビ番組にうり込めば、
ついてこないスポンサーは
ありますまい』
- 514 『もっとなにかあなたのた
めに、してあげられることが
あつたのでせうか。
- 515 もしそうだつたら、僕がい
けなかつたのです。
- 516 あなたが僕に親切だつたや
うに、僕もあなたにさうあり
たいとおもつてゐたのですが、
- 517 もう、おそいのです。さよ
うなら。
- 518 わたしは、ゆかなければな
りません』
- 519 あひかはらず、かなしさう
な微笑をうかべたままキリ
ストは立つてゐたが、
- 520 突然、枯草のうへをきりき
り廻つて近よつてきた砂塵
の小旋風が、
- 521 眼の前から彼さらつて、一
回二回、裏おもてにしてみせ
てから、
- 522 キリストはみえず、竜巻だ
けになつて、みるみる遠ざか
り、うす光りした海のむかう
へきえていつた。

あなたの二十代のスキャンダル
を本人自演で、テレビにでもしくん
だら、ついてこないスポンサーはあ
りますまい。（「草稿」、74頁）

『ふれることは愛することかもし
れませんが、氣をゆるさないや
うにしてください。うっかり手をふ
れたら、人間どもはたちまち赤蟻の
やうにたかつてきて、あなたを餌食
にしてしまいますよ』（「草稿」、74頁）

あひかはらず、悲しさうな微笑を
泛べて立ったまま、キリストは、み
るみる、砂塵の小旋風やうに遠ざか
っていつた。（「草稿」、74頁）

「文章の大小の加筆、削除」に伴う削除箇所一覧

序

64 をとこ、をんなの煩はしき、おほかたは金銭や面子にからんだ世事一般に、おもひ煩ふのは、愚の骨頂だ！

四

255 ながらく神を、排他心のシンボルのやうにおもってゐたものだ。

256 信仰をもってゐないものに、論より証拠の奇蹟をみせてくださるのだが、あなたのやりかたではなかったのですか。惻口さうなことばはにぎやかして、迷信にはじまって、迷信に終わるのが宗教といふものだ。

258 人のおしがる貴重品を、氣晴らしに射撃の的にする粹狂人もある。

258 なんにしろ、文明のもと西洋のことだから、ぬかりがあらうはづはないとおもふので、僕は、信者顔して教會に出入りしたもののだが。そんなわけでおぼえてゐて、奴にであつたとき、すぐキリストだとわかつたのだ。

260 人間と同列であることを恥じた彼が、神を名のつたことで、神の氣にさわつたことはわかるとしても、人間どもから見放されねばならないことは、どうしたわけだ。おそらく彼のほうからさうしむけたとおもはれるが、じぶんたちの野心や、利益のためにさんざん利用して、あげくのはてに、すてて顧みまいとするのも、人間の本性のたよりなさのやうだ。

263 振り香爐のみだらなにほひや、めいるやうなミサの祈りに近よるまいと、人目に立たないところをえらんで彼は、逃げあるいてゐる。もつとも敬虔な殉教者の、いまをかぎりの呼びかけにも、彼はこたえてやらない。聖書一つ道づれのおこないすました清教徒、神の名による慈善家のつどひにも、かくれるやうに、うしろを通りすぎる。まるで心がとがめでもするやうなそのそぶりは、彼がほんとうは、不徳な神をそれほどに愛してゐる證據かもしれない。人の不幸や、短所をみるとそうまでうれしがるといふのは、神もまた不しあはせで、短所だらけであるからであろう。

268 それとも、どれほど文明が、神を狭いところへ追ひこんでも人間が神から見放されては生きてゆけまいと、多寡をくくっておいでなのですか。

271 『だから、神にはふれないにこしたことはないと言つたんだ。神の不在に氣づいて、さがさうとするものに、不幸が授かるといふわけですよ。西洋人はそれを知つてゐて、まづ神をつれてきて、あなたたちのころにともつてゐる燈を、ひとつ、ひとつ、ふき消させようと、はかつたといふわけだ。』

八

506 僕の本心は、彼と別れるのがつらかつた。世界中の人間を出しぬいて、僕ひとりが、イエスを獨占し、誰にもしられずにあるこのひそかなよろこびを失ひたくないこと

もたしかなことだ。(こんなことは一生にもう一度、出くはすことはないだらうから。何千何万の人たちのなかで、たった一本ひきあててくじ運のやうなものだから) どうしても、ひき止められないとわかつたとき、僕は、僕の自轉車を錢別にした。507 残骸に近い古物こぶつではあるが、まだうごかないわけではない。『これからどこへおいでですか』僕がたづねると、にぎりのすっぽぬけた、錆びたパイプのハンドルを、片手で、いとしむやうにさすりながらキリストは、こたえる。『これに乗って、朝鮮から海岸添あまかおひに大陸を、阿瑪港までゆくつもりです』